僕とみんなのスクールライフ☆

棗悠介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とみんなのスクールライフ☆

【Ｎコード】

Ｎ７３６２Ｈ

【作者名】

棗悠介

【あらすじ】

どこにでもある学校生活。プラスちょっとのファンタジー。僕とみんなが送る、学園ストーリー☆

プロローグ☆（前書き）

この小説は一人称で進みます。

プロローグ☆

僕が通っているのは、どこにでもあるような普通の学校だ。

しかし、学校そのものが普通でも、そこに通う生徒が普通とは限らない。

つまり

その学校は、他の学校よりなぜか変人が多いのだ。

僕はその学校にいる数少ない常人の一人。

何であんな学校に入っちゃったんだろう……。

あ、そろそろ学校行く時間だ。

じゃあ、また後で！

第1話　僕と佐藤☆（前書き）

よーし！がんばって書くぞー！

第1話　僕と佐藤☆

「夏だぁー！！」

昼休み、佐藤はそんなことを叫んでいた。

「まだ春だよ」

「いや、もう俺の中では夏だ！サマーだ！エンドレスサマーだ！」

「春だよ。てか、エンドレスサマー関係ないし。ハルヒネタ乙」

「冷たいなぁ遊(ゆう)は。じゃあ何月から夏なんだ？」

「うーん…7月くらいからじゃないかなぁ？てか、今4月だよ？春じゃないか、春の真っ只中じゃないか」

「誰が4月が春だと決めたんだ？こんなくそ暑いのに春だと言い切れるのか！？」

「佐藤くん？テレビを見てごらん？春の桜特集やってるよ？それと暑いことについての愚痴は、地球温暖化を進めている先進国のお偉いさん方に言ってほしいなぁ」

「もしもし、母ちゃん？総理大臣の電話番号知らない？」

ホントに文句言う気だ！てか、お前の母ちゃんが総理大臣の電話番号知ってるわけないって！

「…え？分かった。ちょっとまった、紙とペン用意すっから。えーと…０９０…」

知っていた！

「よし！今から総理に文句言ってやる！」

「…うん、そだね…」

『トゥルルル…』

「くそ！総理め！居留守使ってやがる！」

いや、まだ一回しかコール鳴ってないでしょうが…。

『トゥルルル…』

「総理め！この俺がそんなに恐いか！？」

いや、総理はお前のことを脅威には思ってないと思う…。

『トゥルルル…』

「総理めぇ！俺をこけにしているのか！？ふざけやがって！今日から毎日ワン切りしてやろうかコラ！？」

むしろ怖いわ。

『トゥルル…ガチャ』

「…えーごほん、本日はお日柄も良く…」

ご丁寧だ！

『何ですかぁ～？』

お、ケータイの音量デカいせいか相手の声も聞こえるぞ。

「お前が総理だな…！」

『違います』

違かった！

「…いや、お前は総理だ」

いや、違うって言ってんじゃん！

『違います』

あんたもツッコんであげて！多分ボケてるだけだから！…多分。

「俺は真面目に言っているんだ！お前は総理大臣なんだろう！？」

佐藤ごめん！ボケかと思った！

『違います』

あんたそれだけか！

「お前が総理なんだろう？」

『違います』

「多分お前が総理だ！」

『違います』

「総理のはずだ！」

『違います』

「お前が総理であってほしい！」

『違います』

「総理！総理！！総理！！！」

『違います』

「……分かった。だが念のため最後に聞いておこう。…お前は総理大臣ではないのか？」

『黙秘権を発動する』

なぜ黙秘権を！？

「……分かった。パス1だな」

『パスはあと2回までか…』

「いーや、誰がパスは3回までと決めた？パスは1回までだ！」

『な、何だと！？公式ガイドブックには3回までと…』

公式ガイドブック！？

「…ここでは俺がルールだ！！」

『な、何だって！？』

「フッ…、さぁ答えるがいいさ！お前は総理か否か！！」

『否。以上。ガチャ…ツーツー』

「……」

「……。えーと…、佐藤？」

「死のう」

「いやいやいや！！」

なぜ総理じゃなかっただけで自殺願望が！？

「何で総理じゃないんだぁーー！！」

佐藤はそう言いながら窓から飛び降りようとしていた。

「だめぇーー！佐藤ーー死なないでぇーー！！」
「いやだぁーー！！止めないでくれぇーー！！」
「死んだらお前の母ちゃんが悲しむってぇーー！！」
「母ちゃんのせいでこうなったんだぁーー！！」
「そういやそうだったぁーー！！」
こいつの母ちゃんはなぜ息子にあんなどうでもいい嘘を！？
そして電話にでたあの人は誰だったんだ！？
そして何でこんなことになったんだっけ？
「うーん…」
そんなことを考えていると、佐藤が窓から落ちないように佐藤の制服を引っ張っていた手を離してしまった。
案の定、その反動で佐藤は……
「ギャアァーーーーー！！」
落ちた。
ていうか、むしろ墜ちた。……多分。
「……」

キーンコーンカーンコーン…

予鈴が鳴った。

「…あ、次移動教室だった」

僕は次の授業の荷物を持ち、歩き出す。

ふと、僕は佐藤のことを思い出す。

「佐藤……。君のことは忘れないよ……。」

「……おい！」

振り返ると、そこには佐藤が血だらけで立っていた。

「……誰？」

「おい！！」

まぁその後、佐藤は死にそうだったので、保健室に連れて行きました。

後々訊いてみたところ、佐藤は内臓破裂とかいろいろで、普通だったら全治1年くらいの重傷だったそうです。

でも、次の日になったらピンピンしていて、何事もなかったように学校に来ていましたとさ。

チャンチャン。

第1話　僕と佐藤☆（後書き）

佐藤は無敵です。殺しても死にません。

第2話　僕らと鬼ごっこ☆（前書き）

やっと第2話だ……。

第2話　僕らと鬼ごっこ☆

「春だぁー！！」

次の日の昼休み、また佐藤は何か叫んでいた。

「うん、そだね。そんな当たり前のこと大声で言わなくていいよ」

「いやっほーーう！春だぁー！！」

「うっさい！」

「Ｉｔ　ｉｓ　ｓｐｒｉｎｇ　ｎｏｗ！」

「Ｓｈｕｔ　ｕｐ！」

「何なんだよ。さっきからよ！」

「いや、それこっちのセリフ…」

「まぁいいや。ほら見ろよ遊、コスモスが咲いてるぞ。春を感じるなぁ」

「いや、コスモスは秋の花だよ。…てか何で咲いた？コスモスが咲く季節を間違える程気候変動は深刻なのか！？」

「あ、間違えた。桜だった」

「桜とコスモス間違えんな！」

ダメだこいつ……早くなんとかしないと…！

「ところで遊、暇だから何かして遊ぼうぜ！」

「それもそうだね。何して遊ぼうか」

「そうだな…鬼ごっこでもしようぜ」

「鬼ごっこて…まぁいいや。でも2人だけじゃあ面白くないから誰か呼ぼうよ」

「そうだな」

「って言っても教室には、ほとんど誰もいないね。じゃあ4人でやるとして、僕と佐藤で1人ずつ捕まえてこようか」

「めんどくせーが、まぁそうするか」

「じゃあ捕まえてきたら教室に集合ね」

「おう」

「じゃあ……ミッションスタート！！」↑言ってみたかった。

「とは言ったものの…」

廊下を歩きながら呟く。

「高校生にもなって鬼ごっこ…ねぇ」

誘うの少し気が引けるなぁ…。

誰を誘おうか……。

「あぶないよぉ」

廊下の曲がり角に差し掛かったとき、すごい勢いで野球ボール（しかも硬式）が飛んできた。

「ん？」

ドカッ！

「ぐふぅ！」

なぜ野球ボールが……。

み、みぞおちに入った……。

「あ、遊！大丈夫？……w」

「な、なんとか……」

本当は死にそうなんだけど…。てか、今笑わなかった？

「あはは！ごめんね！！何本逝った？」

何か楽しそうだ！！

「いや…骨は折れてないから大丈夫…」

「……チッ…」

「！！？」

この態度のあまりよろしくない子は田宮みちる。栗色のショートヘアーが特徴で、背も小さく、顔もかわいらしいことから、みんなからみちるちゃんと呼ばれている。

だけど、性格が……。

「…折れればよかったのに…ボソッ」

ドS過ぎる……。

「それよりみちるちゃん、鬼ごっこやらない？」

一応誘ってはみる。

「鬼ごっこ？やらないよ」

やっぱり…。

「…ん？…待って……」

「どうしたの？」

「…そぉうだ。やっぱりやるよ。鬼ごっこ……ニヤリ」

今、みちるという名のドS嬢が不適に笑っていたような……。気のせいだよね。多分。

「何でいきなりやることにしたの？」

「殺りたいから、殺るんだよ？……ニヤリ」

「字が違う！！てか、誰を殺りたいの！？僕がターゲットだったら、鬼ごっこなんか止めて全力で逃げることに専念するよ！！」

それこそ本当の鬼ごっこだ！リアル鬼ごっこだ！

「大丈夫だよぉ。遊は殺らないってぇ……ニヤリ」

最後の『ニヤリ』がすごく気になるんですが……。

「と、とりあえず教室に集合だから付いて来て」

「早く殺りたぁい！」

「学校で殺人事件は起こさないようにね。みちるちゃん」

この子なら、本当にやりかねないから恐い。僕も何度殺されかけたことか……。

「あれ？佐藤はまだか…」
集合場所である教室に、佐藤の姿はまだなかった。
「ところでみちるちゃん」
「なぁに？」
「さっきのあれ、何やってたの？」
「さっきのって？」
「野球ボール僕に直撃した時の」
「ああ、あれ？あれは、本当は遊に当てるつもりはなかったんだよ。本当は教頭を殺……何でもない」
「教頭逃げてぇぇ！」
それにしても何で、みちるちゃんの殺害リストに教頭が！？
「それにしても、あれでは人は死なないのか……。うん、勉強になった！ありがと！遊！」
「感謝されてるようだけど、全然全くこれっぽっちも嬉しくないんですが」

それから待つこと5分、佐藤が来た。

「やぁ佐藤、結構遅かったね。誰連れてきた？」

「おう。わりーな、遅くなって。こいつ連れてくるのに手間取っちまってよ」

佐藤は手を引いて、無理やり連れてきたようだった。

「ふーん……って何連れてきてんのぉ！？」

「何だよ？誰連れてきたっていいだろー？」

「いや、せめて人間を連れてきてぇ！！」

佐藤に連れてこられたそいつは頭髪がなく、目が異常に巨大で、顎に触角のようなものが付いている……。

はっきり言って人間ではない。

「……」

どっから連れてきたんだ……？

「えー…と、佐藤あのさ…」

「ん？何だ？」

「それ…その人（？）の名前何ていうの？」

「マイケルだよ。な！マイケル！」

「Φεεενμυψεχψδμλκσφχχω」

「ほら！」

「ほら！…って何が！？

僕には異星の人の言葉にしか聞こえなかったけど！？翻訳してよ！！」

「マイケルってハーフなんだよな。名字何だったっけ？」

無視かい。

「κλλνεφηοχφμνξοψωωαζε」

「須藤っていうのか」

「言ってない！そんなこと一言も言ってない！！

少なくとも僕には聞こえなかった！

てか、ハーフはない！純血だよ！確実に純血だよ！！純血の異星人だよ！！」

「そういや、マイケルって帰国子女なんたってな。どこの国にいたんだ？」

「ηζεμλωπ」

「ヤードラット？知らない国だな」

「いやそれ星の名前だと思うよ！？悟〇が瞬間移動学んだ所だよ！てか、本当にあったんだ！？ヤードラット星！」

もうめんどくさいから、マイケルはヤードラット星人ってことでいいや。

「じゃあ４人集まったことだし、始めるか！鬼ごっこ！」

「わーい！……ニヤリ」

「κλλμδβαθηψωο！！」

まぁいいか。危害を加える様子はないようだし。てか、須藤マイケルさんよりみちるちゃんの方が危害加えてきそう……。

「てか、どこでやんのさ。鬼ごっこ」

「そうだな……じゃあ校舎内全体ってのはどうだ？校舎内だけでサバイバルだ！」

「……いいね。サバイバルか…。おもしろくなってきた！！」

「わーい！サバイバルだぁ！」

「じゃあ、じゃんけんで鬼を決めようか」

「おう」

「うん」

「ωθψθηo」

「最初はグー！じゃんけん……」

「ポン！」

じゃんけんの結果。

僕はグー。

佐藤もグー。

みちるちゃんもグー。

で、マイケル須藤は

チョキ。

「……」

なっちゃったー。

「マイケル、お前が鬼だぞ！」

「あはは！マイケルくんが鬼かぁ。……チッ」

「……ねぇ佐藤…」

「ん？何だ？」

「マイケルくんは、鬼ごっこのルール知ってるの？」

「さぁ、知ってんじゃねぇの」

「聞いてみて」

「何で俺が？自分で聞けばいいのに…。まぁいいけどよ」

だって、ヤードラット語分かんないんだもの。
てか、何で佐藤はヤードラット語分かるんだ？
実は、佐藤もヤードラット星人……って、んなわけないか。

「鬼ごっこのルール分かるか？」

僕が変なこと考えてる内に、佐藤はマイケルにさっきのことを聞いていたようだった。

「ｏωｏ」

「そうか。遊、分かるってさ」

「そう。てか、返事が顔文字みたいになってる」

「は？何のことだ？」

「いや、何でもない……」

「じゃあマイケル、そこで１０秒数えてろよ」

「わーいわーい！逃げろー」

「ヤードラット星人の戦闘力ってどれぐらいだったっけ？……ん？何か致命的なことを忘れているような……。ま、いいか」

僕らは一斉に走り出す。

「…１、２、３」

マイケルも１０秒を数えだす。あ、数字表記は人間と変わらないようだ。

「４、５、６、７」

何だろう？何か引っかかることが……。

「８、９」

あ、そうだった！

「みんな気を付けろ！マイケルは瞬間移動を使えるぞ！」

「１０！」

しまった！もう数え終わったか！

そんなことを考えていると、次の瞬間にはマイケルが目の前にいた。

「ΦДΦ」

「怖っ！」

てか、また声が顔文字みたいだ！

あわてて僕は逃げ出す。

「あれ？」

追いかけてこないな……。

後ろを振り返ると、短い脚でがんばって走っているマイケルの姿があった。

「脚短っ！そして遅っ！」

よく見たら脚、体長の4分の1くらいしかない……。

「マイケルくん……がんばれ」

そう言い残し、僕はマイケルに背を向け走り出した。

『ブルルル…』

結構走ったところで、佐藤から電話がかかってきた。

「もしもし」

「遊……。た、助けてくれぇ……」

「もしもし！？佐藤！？どうしたの！？」

「た、田宮のやつが……武装蜂起した……」

武装蜂起！？

そんな武力持ってたっけ、みちるちゃん！？

「どういうこと、佐藤……！？」

「やぁ、遊……ニヤリ」

「……み、みちるちゃん？」

「佐藤の命は預かった！佐藤の命が惜しければ、ムチとロープとライターとろうそく持ってくるんだ！！」

「それで何する気だよ！？」

ムチとロープとライターとろうそくといえば、ＳＭプレイの定番のアイテムだ！てか、僕たち鬼ごっこしてたんじゃなかったっけ！？

「あと、０．２秒で持ってくるんだ！」

「物理的に無理だよ！」
「さっきの物に加え、超電磁砲も持ってくるんだ！！」
「科学力的に無理だよ！」
「じゃあ、レールガンを持ってくるんだ！！」
「同じだよ！」
「さっさと持ってきてよ」
「そんなドSグッズ一式、学校にあるわけないじゃないか！」
「佐藤、死亡決定……ニヤリ」
「やめてぇ！！」
「あ、佐藤死んだ」
「いやぁぁぁぁぁ！！」
「嘘だよぉ」
「嘘かいっ！」
「死んだって言うのは嘘だけど、さっき金属バットで頭をすこーしだけ強く叩いたら、動かなくなっちゃったんだよねぇ。何でかなぁ？……ニヤリ」

「佐藤おぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

「あれ？脈がない」

「！！！！？」

「いや、あるは」

「おいっ！」

まだ佐藤は生きてるにせよ、いつか絶対殺される！
みちるちゃんなら、やりかねない！

僕がみちるちゃんの危険度を再確認していると、電話越しにマイケルの声が聞こえてきた。

「πηοεγ」

「……なぁに？マイケルくん？」

どうやら異変を察知した（？）マイケルが、みちるちゃんと佐藤のもとに向かったようだった。

「μνεζηοοπ！！」

あ、何か怒ってるみたい……。

「ΩДΩ……」

「……何泣いてるのよ……」

ズタボロにされた佐藤を見て、マイケルは泣いているようだった。
てか、言葉が顔文字みたいで分かりやすいなぁ。

「…さ……と…う……」

「！！？」

マイケルが……日本語を……喋っ…た……？

「ちょっと！どこ連れてく気なの……！？……あ」

ビュンと、電話越しにもマイケルの瞬間移動する音が聞こえた。
どうやら佐藤と共に、どこかへ行ったみたいだ。

でも、いったいどこに……？

場所は変わり、惑星フ〇ーザＮｏ．７９。

「……ん？……あ！マイケル様が戻られたぞ！」

遠くにいるマイケルの姿を見つけ、異星人１は言った。

「何！？ホイケル様と御一緒か！？」

と、異星人2が続けて言った。

「……いや、御一人のようだ。……ん？誰かを背負っておられるぞ！」

異星人1と2は、マイケルの方へ歩み寄っていった。

「おかえりなさいませ！マイケル様！」

「ΩωΩ」

「……何言ってるかさっぱり分からんけど、言いたいことはなんとなく分かります。はい。……で？その方は……？」

「ΩДΩ」

「……と、とりあえずマイケル様が背負われてる方を、回復カプセルまでお連れしなければ！」

ゴポゴポッ……。

マイケルに連れてこられた佐藤は、裸にされ、回復カプセルなる特殊な回復液の入った機械の中に入れられた。そして、完全回復する時をじっと待っていた……。

数十分後

ゴポゴポゴポゴポッ……。
一気に回復液が抜けていく。
「もう目を開けてもよろしいですよ」
医療範の者だろうか。しわだらけの年老いた異星人が言った。
その声に反応し、佐藤は目覚めた。
「ここは……？」
佐藤は状況の把握ができていないようだ。
「ここは惑星フ〇ーザＮｏ．７９。フ〇ーザ様の統括する数多くある星の１つです」
佐藤は老異星人の説明など、聞いている様子もなく言った。
「戻らなければ……」
佐藤はそう告げると、カプセルの中から這い出し、歩き出した。
「ど、どこに向かわれるのですか？」
佐藤は振り返り、応えた。
「戦場さ」

「あ、だったらその前に……」
「止めるんじゃねぇよ」
「いや…そうじゃなく……」
「世話になったな。じゃあな！」
「……あ……行ってしまわれた……」
老異星人は棚に置いてある服を見つめて呟いた。
「服、着忘れてるのに……」
佐藤は真っ裸のまま去っていった。

佐藤は、休憩所で休むマイケルを見つけた。
「マイケル。俺はもう大丈夫だ。だから、帰ろうぜ！地球に」
「……」
少し間を置き、コクっとマイケルは頷いた。

場所は変わりまして、地球。

「うーん……」

授業中、僕はマイケルと共に消えた佐藤について考えていた。

佐藤とマイケルどこ行っちゃったんだろう……。

もう授業も始まってるっていうのに……。

佐藤がマイケルと共にどこかに行ってしまったため、鬼ごっこは中止となった。てか、そもそもみちるちゃんが佐藤を人質にとった時点で、もはや鬼ごっこじゃなくなってたんだけど……。

「遊！田宮！」

「！！」

教室のドアの向こう側から、佐藤が叫んでいた。

「やっと帰ってきたかぁ……ニヤリ」

みちるちゃんが佐藤の帰還に反応した。

君は何を企んでいるんだよ……。

「今、会いに行きます」

いいから早く入っておいでよ……。

「行くぜ！」

ガラガラッ！

と、音をたて佐藤がドアを開けた。

そして

「待たせたな！」

と、某コードネームに蛇と付く男の決め台詞を言い放った。

教室は静まり返った。

なぜなら

「お前、公勢わいせつで捕まるぞ」

担任の岡崎が、ぶっちゃけた。

「……へ？」

何で、何で裸なんだ。

「……」←一同

翌日の新聞で、こんな記事があった。

『珍事件！少年S、真っ裸で大騒ぎ！計画的な犯行か！？』

佐藤は一躍、時の人となりましたとさ。

第2話　僕らと鬼ごっこ☆（後書き）

マイケルは、ヤードラット星人唯一のフ〇ーザ軍兵士です（多分）。

第3話　僕と希持☆（前書き）

前書きって書くこと悩むな……。

第3話　僕と希持☆

「やぁ、遊。もう帰るの？」

放課後、僕が帰りの支度をしていると、横から声が聞こえた。

「うん。部活もやってないしね。希持は何か部活やってたっけ？」

そこにはサラサラの髪、整った顔立ちの肩書きに美少年と付くだろと思われ男、伊達希持（だてきもち）がいた。

「ああ。俺は、ナマコ研究部の部長だ」

ナマコ研究部！？

「え、えーと……。それは何をする部活だったっけ…？」

「ん？そのまんまだぞ？ナマコを研究する部活だ」

ナマコ研究してどうするつもりだろう……。

「そ、そうだよね！活動内容は謎だけど……」

「さぁ！今日も部活だ！頑張るぞ！！」

「う、うん…ガンバッテ…。ところで、まだ1年生なのに部長なんてすごいね」

「……いや、部員俺しかいないんだ……」

「…あ、何かゴメン……」

「いいんだ……。俺が創ったんだ。ナマコ研究部。だから、まだ部員いなくて当たり前なんだ…」

「へ、へぇー」

勇気あるなぁー。

てか、1人でも部活創れるんだ……うちの学校。

「……！そうだ！！…遊！俺の部活、ナマコ研究部に入らないか！？」

えぇぇぇぇぇぇ……！？

「…え、えーと……」

何で僕なんだ……。

何かすごいやだ、ナマコ研究部……。

「頼む！！」

「え…いや、でも……」

「頼む！！」

困ったなぁ……。

「でもほら、僕なんかが入っても役に立たないと思うし…」ナマコのことなんて、さっぱり分かんないし。

「役に立たなくてもいいから！」

あ、役に立たないことは否定してくれないのか。虚しい。

「頼む！！！」

こう迫られると、断りきれないなぁ……。

「分かったよ……」

「え！入ってくれるのか！？」

「いや、そうじゃない。僕の友達を紹介するから、そいつらを勧誘してみたら？」

「例えば？」

「君も知ってるだろうけど、佐藤とかみちるちゃんとか」

あと、マイケルとか……。

「佐藤って、バカの方のか？」

「うん、そうだよ」

「あいつかー。でもあいつバカすぎるから、間違って俺の大事なナマコちゃんを殺してしまう恐れがあるからなぁ……」

「いや、いくらバカでも、間違ってナマコ殺したりはしないと思うよ……」

「いや……、昔あいつに殺されたんだ。俺の初代ナマコちゃんが……」

「……。間違って…食べたの？」

「ああ……。あいつ許せねぇよ……！俺のナマコちゃんは食いもんじゃねぇ……家族なんだ！！」

あーあ。佐藤、お前は希持の家族の仇だったらしいよ。

「ってことで、佐藤は却下だ」

「じゃあ、みちるちゃんは？」

「みちるちゃんってあの猟奇的な娘のことか？」

「うん、そうだよ」

「……」

僕と希持はみちるちゃんがナマコ研究部に入ったことを想像してみる。

『あは！ごめぇん！あんまりナマコが気持ち悪いもんだから捨てちゃったぁ……ニヤリ』

『部費？あれみちるのお小遣いじゃなかったのぉ？ちなみに全部使っちゃったよぉ……ニヤリ』

『てゆうか、ナマコ研究部なんてある意味あるのぉ？改名してＳＭクラブにしようよぉ……ニヤリ』

「……却下」

「だろうね……」

「じゃあ……マ……なんでもない」

マイケルと言おうとしてやめた。

まず、この学校の生徒であることすら謎だし……。

てか、人間でもないし……。

「何なんだ？マって？」

「いや、気にしないで。それよりどうする？」

「……やっぱり、遊！お前しかいない！お前が入ったくれ！」

……いやだぁぁ……ナマコ研究部いやだぁぁ……。

「と、とりあえずさっきの２人連れてくるから」

僕は、２人を探しに教室を飛び出した。

「いや、だからさっきの2人は却下だって……行っちまった……」
僕は、ナマコ研究部に入らないために必死だった。
ただ、必死だったんだ。

「というわけで、連れてきました……」
「……ああ。つーかこいつらは却下だって言ったろ？遊」
「まぁまぁ」
僕は、ナマコ研究部に入らないために必死だったんだ。
「何なんだよ、遊？俺は教室なんかに用はないぞ？」
と、佐藤。
「何の用かな、遊？早く帰りたいんだけど？……チッ」
と、みちるちゃん。
あ、舌打ちした。恐いよぅ……。
「まぁまぁ」
僕はナマコ研究部に入らな（ｒｙ
「えーおほん……」

僕は、改まり2人に告げた。

「ナマコ研究部に、入らない！？」

結構テンション高めで言ってみた。

「嫌に決まってんだろ」

「嫌だよ。ナマコ研究部って何？存在意義が問われるんだけど……

…ニヤリ」

「だ、だよねぇ」

ショックを受けていた希持を、見て見ないないフリをした。

そんな可哀想な希持を見て、佐藤が言った。

「田宮、お前入ってやれよ」

「……殺すぞ。てめー」

恐い！ついにみちるちゃんの本性が！！

それにも怯まず、佐藤は続けた。

「お前、部活も何もやってないんだから暇なんだろ？だったらいい

じゃねぇかよ」

あわわ……。佐藤、お前はある意味すごいよ……。それと、お前も

部活何もやってないんだから人のこと言えないよ？

しかし、みちるちゃんの口からは意外な応えがかえってきた。

「……分かったよ。入ってあげるよ……ニヤリ」

それだけを言い残し、みちるちゃんは去っていった。

「ふ……」

佐藤は希持の肩を叩き、言った。

「良かったな、希持。これでお前は1人じゃないぜ！」

これで一件落着。

ではなかった。

「佐藤、てめー……！何てことしてくれたんだ、コラ」

「何だよ、希持？これで一件落着じゃねぇのか？」

「お前もあの娘の性格知ってるだろ！？」

「ドSだろ？」

「……はぁ……。終わった……ナマコ研究部」

希持は、魂の抜けたような表情で去っていった。

「……」

僕は救われたわけだけど……罪悪感が……。

「今日もいいことしたなぁ！」

佐藤、いいことどころか、かなり悪いことしちゃったんだよ。

希持、ご冥福をお祈りいたします。

その後の、ナマコ研究部のことは……まぁ

また今度ね！

第3話　僕と希持☆（後書き）

希持は、三度の飯よりナマコを愛しています。

第４話　僕らとテスト☆（前書き）

テスト期間中って他のことに集中できるよねぇ☆

ｂｙ　平沢唯

第４話　僕らとテスト☆

「これから小テストをするぞ」

ある日の英語の授業の時、担任の岡崎がそんなことを言い出した。

「ブーブー！！」

案の定、生徒からはブーイングの嵐。

それぐらいじゃめげないのが、うちの担任の良いところ（？）だ。

「うっせぇぞ！ボケェ！！」

教師らしくはないけど……。

「じゃあ始めるぞ」

テスト用のプリントを配りながら言う。

「制限時間は１５分。カンニングしたやつは処刑」

処刑！？恐っ！！

「今回の小テストは簡単なものにしてある。なので、５０点未満だった者は……処刑」

えぇぇぇぇぇぇ！？

「もとい、補修を行う」
これまた大ブーイングが起こった。
「ブーブー！！」
「黙れぇぇ！！ボケがぁ！！」
「先生ー、キレないでくださーい」
と、1人の生徒が生徒全員の感想を代表して述べてくれた。
「うっさいわ！俺は子供が大嫌いなんじゃボケェ！！」
じゃあ何で教師になんかなったんだ……。
「よーし、始めぇ！！」

よし…終わった…。
結構簡単だった。
みんなは大丈夫だったかなぁ。
特に学校最バカの佐藤が心配だなぁ……。
「うおぉぉぉお！分からぁーん！！」
やっぱりか……。

「うっさいぞ！佐藤！テスト中だぞ！！」

「くそぉ」

※ここからは、学校最バカである佐藤の視点でお送りいたします。

くそぉ…全く分かんねぇ……。

ふと俺は、時計の方に目をやる。

「あと5分！？」

「さっきからうっせぇぞ！佐藤、コラァ！！」

担任の暴言なんて、俺の耳には届かなかった。それぐらいショックを受けた。

ま、まずい。

１０問中１問しか解いてない……。

あと5分で9問を解くことなんて、可能なのか……！？

「……」

いや……俺になら出来る！！

だって真〇ゼミやってるもの！

デキる高校生だもの！

3分後。

無理だぁぁ……。
俺はデキない高校生だったぁ……。
２分で最低４問解くなんて無理だぁぁ……。
……こうなったら。最終手段に出るしかない。そう……。

カンニングをする！！！

これをして見つかれば補修だけじゃ済まされない。
本当に処刑されるかもしれない……。

だが！！
男には、やらなければならない時がある！！
オラが…オラがやらなきゃ誰がやる！！↑誰もやんねーよ。
カンニングステップ　その１
先生、及び生徒が見ていないかを確認する。
「キョロキョロ」
「うっさいつってんだろ！佐藤！何キョロキョロ言ってんだ！！」

くそ！！見つかったか！！

気を取り直してステップその１……クリア！！

カンニングステップ　その２

横の人に悟られないように、横目で答案用紙を覗き見る。

じろじろ。

よし、クリア！！

カンニングステップ　その３

すかさず自分の答案用紙に書き写す。

よっしゃー！！

「……あ」

……忘れた。

キーコーンカーンコーン…。

「よーし、そこまでだ」

「……終わった…。何もかも……」

※佐藤視点終了。

「佐藤、どうだった？」
結果はなんとなく分かるけど、一応聞いてみる。
「終わった…。何もかも……」
「……そう」
深く詮索はしないであげるかな。
「あぁそうだ、佐藤！」
岡崎は佐藤を呼び止めた。
「……何すか？」
「お前処刑な」
「……バ、バレていた…」
「え！？佐藤カンニングしたの！？」
「ああ。失敗したがな……。死のう」
「いや、だからお前は俺が処刑するっつってんだろ」
「……」

「バイバイ佐藤。君のことは忘れないよ」

数日後、佐藤のお通夜が行われた。

「南無阿弥陀仏…」

お経が聞こえる中、僕は呟く。

「さようなら、佐藤」

「おい！勝手に殺すな！」

佐藤だった。岡崎が言っていた処刑っていうのはまぁ冗談で、佐藤はあれから数日間、岡崎のパシリをさせられていたらしい。

「何だよ、佐藤？今、君のお葬式をしていたところだっていうのに」

「生きてる人間の葬式をすなぁ！！」

「いやだなぁ佐藤。今の時代、生きたまま葬式をするのも流行ってるんだよ？」

「それすんの、死期が近いじーさんかばーさんだけだろーがぁ！！」

「あはは！そうかなぁ……ニヤリ」

「あ、みちるちゃん」

「佐藤くぅん。君の死期は近いよ？……ニヤリ」

「……」

どうやら、佐藤の死期は間近に迫っているらしい。

てか、佐藤死亡フラグ立ちすぎ。

第４話　僕らとテスト☆（後書き）

後書きに書くことなんてありません！

第5話　僕らと遊び場☆（前書き）

この話は、後に繋がる話の伏線だったりします。

第5話　僕らと遊び場☆

「どうしよう。このまま帰っても暇だなぁ……」

放課後、僕は今からの活動内容について悩んでいた。

「うーん…。帰りにどっかによって行こうかな……」

「どうしたんだ、遊？」

「あ、佐藤。いやさ、これからどうしようかなぁと思って。真っ直ぐ家に帰っても暇だし」

「そうゆうことなら、今からどっかに遊びに行こうぜ」

「いいね」

「あ、マイケルも一緒でいいか？」

あのヤードラット星人を連れてくると言うのか……。

「いいよ」

悪いやつじゃないと思うし。

「じゃあ、一回帰ってから駅前集合な」

「分かった」

「ただいまー」

自宅に着くと、帰ったときのお決まり文句を言いつつ、自分の部屋へと向かった。

「ふぅ」

ガチャ。

疲れからでた溜め息を吐き出し。部屋のドアを開けた。

すると

「おかえり～」

「うん、ただいま」

鞄を机の上に置き、出かける準備を始める。

「さてと……ん？」

僕の部屋ってひとり部屋だったよな？

……誰だ？おかえりって言ったの？

振り返ると、そこには頭でっかちの短足青狸がいた。

「おかえり。の〇太くん」

「……」

宇宙人の次はロボットか……。

「の〇太くん、またジャ〇アンにいじめられたのかい？」

いや……まだ何も言ってないし……。

それに、ジャ〇アンなんて人知らないし……。

「違うよ。てか、誰？」

「僕、ドラ〇もんです」

やっぱりか……。

「じゃあ、何でここにいるのさ。この世界にはの〇太くんはいないよ？」

「何言ってんだよ、の〇太くん。君がの〇太くんだろ？」

「いや、違うから。あんな顔キモくないから」

「の〇太くん、テストの結果どうだった？」

「いや、だからの〇太じゃないって……」

「どうだったの？の〇太くん」

「……」

もういいや……。

そうインプットされてるんなら仕方ない……。

「ねぇ。の○太くぅん」

うっさいな……。

「良かったよ」

「何点だったの？」

そう聞かれたので、僕は鞄からテスト用紙を取り出す。

「ん……」

そして、ドラ○もんに手渡した。

「どれどれ……。お！すごいじゃないか、の○太くん！９０点なんて！いつも０点ばっかりとってたのに」

「０点なんて一度もとったことないよ……」

「ところでの○太くん……」

「ちょっとまった！」

「何だい？の○太くん」

「その……の〇太くんって呼ぶのやめてくれないかなぁ」
「何でだい？」
「いや、いろいろと」
これドラ〇もんのファンフィクションじゃないし……。
それに、いちいち名前のとこ自主規制するのめんどくさいって作者からの要望が……。
「僕の名前は遊」
「遊太くんだね」
「何でそうなるんだ……まぁいいや」
「あと、君の名前も変えてよ」
「それは、無理だよ」
「なんとかならないかなぁ……」
「……やってみる」
「……え？」
次の瞬間、ドラ〇もんなる物体からいろいろ機械音が聞こえてきた。
『ブゥイーン……。メインコンピューターにアクセスします。
……メインコンピューターにアクセスしました。……名前変更

を行います……』

うわぁぁ……。

なんか、聞いちゃいけないものを聞いちゃったような……。

しばらくして、ドラ〇もんのメインコンピューターへのアクセスは終わったようだった。

「ふぅ…。やっぱり無理だったよ。遊太くん」

「そうか……」

どうやら、自分の名前を変えるのは流石に無理なようだ。

「じゃあ、元の名前は変えなくていいから、全部漢字表記にするってのはどうかな？」

「例えば？」

「うーん……。そうだなぁ……奴裸餌悶とか！」

かなりふざけて考え出した名前だった……が。

「いいねー！流石に遊太くん！」

気に入ってしまった。

「あ、あはは。で、でしょ！」

奴は裸で、餌に悶える……。
直訳するとこうなる……キモいな。

「奴裸餌悶か……。フフ…フフフフフ…フフフ……」

キ、キモい……！

「じ、じゃあね奴裸餌悶！僕遊びに行ってくるから！」

「遊太くんが行くなら、僕も行くよ……フフフ」

着いてくんなぁあぁ……！

時と場所は変わり、駅前。

「おーーい！遊、こっちだぁ」

佐藤が無駄にデカい声で僕を呼んでいた。

「あの短髪でアホそうなのがジャ〇アンだね？」

後ろで、なぜか付いてきた奴裸餌悶がそう呟いた。
てか、妙に毒舌だな。奴裸餌悶。

「……そうだよ」

いちいち否定するのめんどくさいから、もうそれでいいや……。

「あ！例のとおり、ジャ○アンの名前もかえてよ？」

「何て言えばいいんだい？遊太くん」

「……ジャ○アン…Ｍｋ．２……」

「ジャ○アン……何？」

「……ジャ○アンＭｋ．２。通称Ｍｋ．２」

我ながらアホな名前を考えてしまった。

「分かったよ。遊太くん」

ごめん。佐藤、お前の名前今日からＭｋ．２だわ。

とりあえず、佐藤たちのいる場所まで行くことにする。

「遅かったじゃねぇか、遊！何してたんだ？」

「ごめんごめん。まぁいろいろと……ね」

「なんだそりゃ？まぁいいや。さっそくどっか行くとしようぜ！」

「うん。そだね」

異様な存在感を放っていたマイケルは、あえて無視する。

すると、佐藤が奴裸餌悶に気付いた。

「お？悠、誰だそいつ？」

「えーと…こいつは…奴裸餌悶…」

「おぉ！ドラえもんか！マジか！俺、昔から空を自由に飛びたかったんだよー！」

「いや…ドラえもんじゃない。奴裸餌悶…ね」

「どこが違うんだ？」

「表記」

「？……まぁいいけどよ」

「よろしくな！奴裸餌悶！」

「よろしく。Ｍｋ．２」

「Ｍｋ．２？何だそれ？」

佐藤がこっちを向いた。

僕はすかさず視線を逸らす。

じーっと見てくる佐藤。

「……」

「……」

長い沈黙の末、佐藤が言った。

「俺の下の名前はＭｋ．２だったのか！」

何か勘違いしてくれた！

てか、自分の下の名前知らなかったのか！？

「そ、そうなんじゃない？てか、そうだよ。きっと」

「そうかそうか！俺の名前は佐藤Ｍｋ．２だったのか！」

あ、佐藤は下の名前最初からなかったのか。

てか、作者が決めてなかっただけか。

「遊！今日から俺のことをＭｋ．２と呼んでくれ！」

「いや、普通に佐藤って呼ぶことにするよ。それより早く行こうよ。遊ぶ時間がなくなる」

「そうだね。遊太くん」

「θεθ」

「おう」

一通り挨拶を終えたので、街へ向かうとする。

向かう先は、電車で１０分程行った場所にある街だ。

ゲーセンやカラオケなどの娯楽が多いため、学生の遊び場としてよ

く利用されている。

「着いたぁぁ！」

「小学生じゃないんだから、そんなこと大声で言わなくていいよ」

街に着いた僕たちは、とりあえずゲーセンに行くことになった。

「さて、何しようかな」

「遊！こっちだ、こっち！」

「どうしたの、佐藤？」

「クレーンゲームがあるぞ！」

ゲーセンなんだからあるに決まってるだろ……。

「うぉ！このぬいぐるみ欲しっ！」

お前は少女か……。

「遊ぅ～！取ってぇ」

お前は僕の彼女か……。

そして、気持ち悪い……。

「べ、別にいいけどお金は佐藤が出してよ？」

「おう！頼んだぞ、遊！」

そう言いながら、佐藤は僕に１００円玉を渡した。

「よぉし……！」

佐藤にもらった１００円を入れ、ゲームを始める。

狙うは、手前の左側にあるクマのぬいぐるみだ。

ちなみに、取るための穴は手前の右側にある。

早速始めるとする。

まずは横にクレーンを動かしぬいぐるみのところまで持っていく。

「……っよし！良い感じだ！」

次に、縦にクレーンを動かす。

ぬいぐるみが一番手前にあるため、縦に動かすボタンはちょっと押すだけでよかったのだが……。

「あっ！ミスった！」

長く押しすぎてしまった。

案の定、クレーンは目標のクマのぬいぐるみを取るコースから外れてしまった。

「おい、遊！どうすんだよ！」

「ごめんごめん。……あ、でも違うの取れそうだよ！」
目標のクマのぬいぐるみの奥にあった、別のものにクレーンが引っ掛かった。
「よし！取れる取れる！」
しかし、取れたものはぬいぐるみではなかった。

「……」
「……佐藤……いる？これ」
「……いらん……」
「……」
取れたものは、なぜクレーンゲームの中に入っているのか分からないほどボロボロの洋人形だった。
てか、何か怖いんですけど……この人形……。
何か口から赤いもの垂れてるんですけど……。
今にも「わたしメリー」とか言い出しそうで怖いんだけど……。
まさに呪いの人形だった。
「……佐藤……これは、君のものだ」

「仕方ない。言い出しっぺは俺だしな！俺が処分してきてやるよ」

「……うん……」

呪われても知らないけど……。

次に僕らはレースゲームをした。
結果は、マイケルが1位、僕が2位で奴裸餌悶が3位、佐藤がビリだった。
てか、マイケルズルしてなかったか？なんかマイケルの車両空飛んでたけど……。
宇宙人にはそんなことも可能なのか？
奴裸餌悶は、なかなかのドライブテクニックで、僕と激戦を繰り広げた。
佐藤は……口ほどにもなかった。

そのあともいろいろなことをした。
太鼓の達人したり、鉄拳したり。

そして、楽しい時間はあっという間に過ぎ、日が暮れたあたりで解散となった。

「じゃあなー遊！」

「θεθ」

「うん、じゃあねー佐藤、マイケル」
僕も家へと帰るとする。
「今日は楽しかったね、遊太くん」
まだいたのか……奴裸餌悶……。
「そういや、奴裸餌悶。君、どこに帰るつもり？」
「ｍｙ　ｈｏｕｓｅだよ」
「……ｍｙ　ｈｏｕｓｅってまさか……」
「遊太くんの家だよ」
「やっぱりか……。」
どうやら奴裸餌悶は僕の家に居候する気らしい……。
「はぁ……」
そして、僕の家に家族が１人増えたのであった。

その頃、佐藤とマイケルは帰路が同じだったため、一緒に帰っていた。

「今日は楽しかったな、マイケル！」

「ηεη」

「そうだな！」

「μνλτφχ？」

「え？そうなのか？俺はいいと思うぞ？」

「ΥΦΥ……」

「そうだって！落ち込むな！」

「σφπρρρο！」

「そうだぞ！」

「ηДη！」

「はっはっはっ！」

常人には、意味不明な会話をしていると、帰路か分かれ道に差し掛かった。

「じゃあ、俺こっちだから。じゃあなー、マイケル！」

「ιδεδ」

マイケルと別れてしばらく歩いていると、佐藤はクレーンゲームで取った洋人形のことを思い出した。

「あ、そういやこれどうすっかなぁ……」

すると、ふとゴミ置き場が目に入った。

「じゃあここに置いとくか。……よし。さて、今日の夕飯は何かなぁ～♪」

佐藤は、口笛を吹きながら歩き出した。

このとき、佐藤は知らなかった。

ゴミ置き場に捨てた洋人形が、佐藤のことを見つめていたことを。

その洋人形の名前が「メリー」だということを。

第5話　僕らと遊び場☆（後書き）

はっはっはっ、書くことないｗｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7362h/

僕とみんなのスクールライフ☆

2010年10月12日07時19分発行